

「あいちトリエンナーレ」との出会い方

吉田 隆之



よしだ・たかゆき 1965年神戸市生まれ。東京芸術大大学院修了。博士(学術)。愛知県庁を経て、大阪市立大大学院准教授。県庁在職時はあいちトリエンナーレ2010を担当。専攻は文化政策、アートプロジェクト。著書に「トリエンナーレはなにをめざすのか 都市型芸術祭の意義と展望」(水曜社)など。

十一日から三回目となるあいちトリエンナーレ2016が開催される。あいちトリエンナーレの特徴はその規模感だ。この時代の世界各地の一流アーティストの百余りの作品が愛知県にいながら体感できるのだ。

中でも注目したいのは、三回連続で会場となった長者町織維街(名古屋市中区)の展開である。

芸術祭がコミュニティの形成に影響を与えることが注目されているが、まちの人たちがアート活動やまちづくりを展開・発展させてきた。一つのきっかけが、あいちトリエンナーレ2010でアーティストユニットKOSUGEI-3が山車を制作し、まちが譲り受けたことだ。閉幕に合わせ十月二十二日、「あいちびす祭り」が開催され、七年連続となる山車の練り歩きが見どころだ。一方、若者やアーティストらが長者町に縁を持ち、問屋の空きビルをリノベーションした「長者町トランシットビル」などを拠点にアート活動を継続してきた。

今回もまち、若者、アーティスト、行政がさまざまな企画を協働し、実現している。こうした周辺での展開は百年以上の歴史を持つベネチア・ビエンナーレを彷彿させるものだ。八月十九、二十日は長者町大縁会が開催される。長者町で活動するグループが毎年実施してきたお祭り、まちなか結婚式、盆踊り、星空灯会、長者町銀座などプログラムが盛りだくさんだ。

作家で注目したいのが、ルアンルバ。インドネシアでアーティストらが設立した非営利団体(約十人)で、ジャカルタでアトスペースを運営する。最近では人材育成に関心を持つ。長者町では、レクチャリーやワークショップを公募町のようにアートによるまち

楽しみ探る苦痛も醍醐味

し、参加者がまちとアートの問題を自律的に考え、解決していく学校を出現させる。ルアンルバと長者町がどのような化学反応を起こすのか、楽しみな作品である。

パフォーミングアーツは大し、参加者がまちとアートの問題を自律的に考え、解決していく学校を出現させる。ルアンルバと長者町がどのような化学反応を起こすのか、楽しみな作品である。

「大年増の厚化粧」がめった初挑戦での都知事就任となった。悪口を人気につなげた彼女の方が、人心を握ることにたけている。石原の政治上のより強大な敵であった田中角栄に

大波小波

「大年増の厚化粧」がめった初挑戦での都知事就任となった。悪口を人気につなげた彼女の方が、人心を握ることにたけている。石原の政治上のより強大な敵であった田中角栄に

は、石原自身はなしえなかつた。いずれにせよ小池は、石原自身はなしえなかつた。いずれにせよ小池は、石原自身はなしえなかつた。

拠点「アートラボあいち津橋」長者町」に出かけ、情報収集することもできる。ただ、参加の仕方も楽しみ方も、決してテーマパークのように優しくは教えてくれない。異なる価値観との出会いは苦痛を伴うかもしれない。しかし、困難や苦痛が大きいほど、他では得難い経験を得られるだろう。